

# 人新世に読み直す『灯台へ』

原田 洋海

## 1. 序論

ヴァージニア・ウルフの『灯台へ』(To the Lighthouse, 1927)では、スコットランド沖のスカイ島とそこにあるラムジー一家の別荘が主要な舞台となっている。そのモデルとされるのは、ウルフが幼少期に家族とともに毎年夏に過ごしていた、セント・アイヴズという小さな町と一家のタラント・ハウスという別荘である。ウルフが「過去の素描」(“A Sketch of the Past”)に記したように、セント・アイヴズは彼女にとって“the first memory”(Moments 64)であり、『灯台へ』には彼女の記憶に残る数々の自然が描写される。一方で、20世紀初頭には、科学技術の発展や第一次世界大戦による自然環境の破壊が問題になっていた。人間の営みが地球に対してますます影響力を持つようになっていくことに人々は気づき始め、モダニスト作家たちもまた、大規模な環境の変化に対して形式やスタイルを通して文学的実験を行った(Adkins 2-4)。近年、モダニズム期の作品を人新世の観点で補助線として読み直す研究が注目されており、ウルフの作品も例外ではない。特に『灯台へ』の第二部「時はゆく」はこれまでしばしば批評の対象となっており、例えばピーター・アドキンスは第二部について、ウルフは登場人物と同様に人間を超えた世界にも注目し、非人間中心的世界を想像することに関心を示していると指摘する(Adkins 4)。このような人間の脱中心化は本作の重要な主題のひとつとなっている。本論では、『灯台へ』における自然描写に注目し、いかにウルフがさまざまな視点を通して従来の人間と非人間の関係を揺さぶっているかを考察する。

## 2. 文学的形式上の脱人間中心化

第二部で誰もいなくなった別荘の家が荒廃していく様子は「タイムラプス撮影」(Garrard 41)に似て、まるで読者は人間のいなくなった世界を定点カメラ越しに覗いているかのようである。そのような非人間が中心となる語りの中では、登場人物の死などの人間にとって重大な出来事はブラケットの中で言及されるにとどまる。このことは、第二部では人間が表舞台から姿を消していることも関係しているが、そこで中心的に描かれる自然が人間の営みや存在に対して無関心であることを暗示している(Scott 323)。一方で、第三部「灯台」では、その逆の現象も見られる。ラムジー一家が灯台へ向かう舟では、漁師であるマカリストー氏の息子は釣りをしており、餌として魚の身を切り取る。ここではわずか二文だけで第三部の第六章を構成しており、読者にとって視覚的にも注意を引く場面である。アンドリューが“mercifully”(109)にも即死であった一方で、魚は体を四角く切り取られても“alive still”(148)だったのであり、釣りという日常的な人間の営みの残虐性、あるいは人間にとっての非人間への無関心が前景化される。従来の小説において重大な出来事として描かれる登場人物の死と、些末なものとしてされる魚の苦しみが形式上同様に描かれていることは、人間をその他の生き物の上に位置付けるような種のヒエラルキーの転覆を意味する。以上のように、登場人物を退場させて人間がいない時の自然を想像したり、ブラケットを活用したりすることで、人間と非人間の相互の無関心を提示し、さらには種間のヒエラルキーの脱構築を試みるなど、ウルフは文学的な形式において実験的に脱人間中心化を図っているのである。

## 3. 海洋汚染と感星的想像力

次に、登場人物の意識を通して語られる第一部と第三部のさまざまな視点について考察する。第一部では若者たちが海岸へ散歩に行く場面がある。ナンシーは岩場で物思いにふけりながら、想像の中で潮溜まりを大海原に変えていく。そのミニチュアの潮溜まりの世界では、ナンシーの視点は“like God himself”であり、手で日光を遮り“millions of ignorant and innocent creatures”に“darkness and desolation”をもたらす(63)。しかし、わずかに視線を上げて現実にある目の前の広大な空や海を眺めていると、彼女もまたこの世界においては無知で無垢な生物にすぎないことに気付き、自分の体や命、さらには世界のあらゆる人々の命すらも無に帰すように感じ身動きが取れなくなる。世界の広大さと潮溜まりの小ささという相対性においてナンシーは人間の矮小さに思い至るのである。

ハンナ・フリードソールはこの場面を、ラムジー夫人がジェイムズに読み聞かせる“The Fisherman and His Wife”というグリム童話に結びつけ、人間を超えた世界に対する、人間の及ぼす力および無力さという問題をこの童話は浮き彫りにしていると指摘する(Freed-Thall, 94-95)。童話の中で、漁師の妻の願望は人間の世界のことならすべて叶えられるが、太陽と月を思いのままに動かしたいという人智を超えた願いだけは断られ、それどころか今までの願いもすべて無に帰してしまう。さらに興味深いのは、童話のクライマックスの場面で実際に小説に引用されるのが、荒廃した海と嵐の描写であるという点である(51)。この童話は、人間の尽きることのない欲望に対する教訓めいた物語であるが、一方で、人間の欲望に伴って荒廃する空と海の様子が描かれる、いわば海洋汚染

の物語でもあるということが前景化されているのである。

ここで別の観点から再びナンシーと潮溜まりの場面に注目したい。彼女は小さな潮溜まりの世界に手をかざして日の光を遮るが、このことは、『灯台へ』の出版後二か月も経たずイギリスで観測された皆既日蝕を想起させる。観測地には大勢の人々が詰めかけたが、ウルフもまたその一人であり、日蝕の様子を “We had seen the world dead. This was within the power of nature” (D 3: 144) と日記に記録している。アドキンスが述べるように、「日蝕の観測者たちは、冷たく無関心な惑星によって、人間中心主義と人間による支配が取り除かれた世界を見せつけられた」のであり、「日蝕についてのウルフの記述は、人間の生活やそれを支える環境の不安定さについての懸念をとらえたものとして読める」(Adkins 2)。先述の童話では、太陽と月を操りたいという願望だけは叶えられなかったが、このとき人々は日蝕という惑星規模の現象を現実において目の当たりにしたのである。

『灯台へ』が出版されたのはこの日蝕よりも先だが、ウルフがあらかじめ日蝕を想像して書いていたであろうことは想像に難くない。ナンシーの場面に加え、第二部「時はゆく」にも “So with the lamps all put out, the moon sunk, and a thin rain drumming on the roof a downpouring of immense darkness began. Nothing, it seemed, could survive the flood, the profusion of darkness . . .” (103) と日蝕を思わせる描写がある。実際にはこれは日蝕ではなく夜の描写だが、この暗闇が訪れるのはすべての明かりが消された後であり、これは “the shadow when suddenly the light went out” (D 3: 143) というウルフの日蝕についての記述に近い。また、「時はゆく」の草稿のアウトラインでは、“Darkness” のみならず “The gradual dissolution of everything” (191n) も挙げており、これも日記に書かれた日蝕の描写を想起させ、観測前からウルフは日蝕についての想像を膨らませていたものと思われる。「なにものも生き残れない」ような、人間を超えた力への無力さに対するウルフの想像力はここでも示されているのである。

#### 4. 距離と想像力

第三部では主に、再びスカイ島へやってきて絵を描こうとするリリーと、灯台へ向けて出航したラムジー家の三人の意識を通して語られ、それぞれ島から海を、海から島を遠距離から眺める。ケリー・ズルツバッハは、距離と視点は瞬間、人、物の意味を十分に理解するのに決定的になる (Sultzbach 142) と述べるが、ナンシーが潮溜まりから大海原に視点を移したように、距離をとって物事を見ることによって、登場人物たちは人間と非人間の関係に新たな理解を得ている。例えばリリーはラムジー夫人のヴィジョンを保つために、気が逸れないように海を眺めながら、“Distance had an extraordinary power” (154)、“So much depends, . . . upon distance” (156) ということに気づく。距離には驚くべき力があり、距離を変えることで人との心理的な距離感も変わっていく。この直後、キャムもまた、距離によって新たな視点を獲得する。彼女は舟の上から自分たちの暮らしていた島を眺め、子供のころに生活の中心となっていた別荘あるいは島そのものも、宇宙の中の一部なのだ気付くのである。さらに沖へ行くにつれて島はさらに小さくなり、葉の形を失い、大波にのまれそうな岩の頂程度にしか見えなくなるが、その存在しているかどうか確認できないほど遠い島、その存在の “frailty” (166) の中に確かに、かつて過ごした小道やテラス、寝室、数えきれない様々なものがあるのだとキャムは考える。リリーが考えているように、距離をとることで俯瞰的視野が得られたり、見えなくなってしまったものへの想像力が働いたりするのである。

#### 5. 結論

以上のように、ウルフはかつてのセント・アイヴズの自然に想像を巡らせ、空や海へまなざしを向けることで、従来の人間と非人間との関係や、世界における人類の立場をさまざまな視点を通して再考している。リリーが、何かを理解するには五十対の目が必要だと言っているように (161)、人間以外の世界を理解するにも多くの視点から想像する必要があるだろう。

\* 本発表は、JSPS 科研費 JP24K03763 の助成を受けている。

#### 引用・参考文献

- Adkins, Peter, editor. *Virginia Woolf and the Anthropocene*. Edinburgh UP, 2024.
- Freed-Thall, Hannah. *Modernism and the Beach: Queer Ecologies and the Coastal Commons*, Columbia UP, 2023.
- Garrard, Greg. “Worlds Without Us: Some Types of Disanthropy.” *Substance*, vol. 41, no. 1, 2012, pp. 40–60.
- Scott, Bonnie Kime. “Ecocritical Woolf,” *A Companion to Virginia Woolf*, edited by Jessica Berman, Wiley Blackwell, 2016, pp. 319–31.
- Sultzbach, Kelly. *Ecocriticism in the Modernist Imagination: Forster, Woolf, and Auden*. Cambridge UP, 2016.
- Woolf, Virginia. *The Diary of Virginia Woolf, Vol. 3: 1925–1930*. Edited by Anne Oliver Bell, Hogarth, 1980.
- . *Moments of Being*. Edited by Jeanne Schulkind, Harcourt, 1985.
- . *To the Lighthouse*. Edited by David Bradshaw, Oxford UP, 2006.